生徒が主体的に学ぶ指導の工夫
－中学校英語科におけるコミュニケーション活動の充実を通して－

坂本　英子(21024)

1.　はじめに

学習指導要領では，生徒に目指す資質・能力を育むために「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することが求められている。また，外国語科の目標の中には，「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」[1)]とある。

これまで出会った生徒の多くが「試験のために」英語を勉強しており，「コミュニケーションツールとしての英語」に価値をおいて勉強している生徒が少ないと感じてきたことから，「コミュニケーション活動に積極的に取り組み，英語習得のために粘り強く努力する生徒」の育成を目指したいと考えた。そこで，実際のコミュニケーション場面を想定した授業を行い，英語使用の意欲につなげるような指導をしたいと考え，本研究テーマを設定した。

2.　研究の目的

本研究では，生徒の主体的に学ぼうとする意欲を高めるための「タスク」と，生徒の主体的な学びを支えるための「協同学習」を中心とした授業デザインを行い，それらについて考察し，生徒が英語を生きた言語として主体的に使うための指導法を提案する。

3.　研究方法

3.1　生徒が主体的に学ぼうとする意欲を高める「タスク」

松村（2012）は，タスクの特徴を「設定されている目標に至るために，学習者はどうしても英語を理解したり話したりしなければならない[2)]ということ」とし，課題がタスクとみなされるための条件として，①活動成果の重視，②意味へのフォーカス，③自然な認知プロセス，④学習者の主体的関与の 4 つをあげている。タスクは生徒の主体的な関与と判断を生み出すことができ，生徒が英語を生きた言語として使うための指導が行えると考え，このようなタスク要素を取り入れた授業デザインを行う。

3.2　生徒の主体的な学びを支える「協同学習」

江利川（2012）は，協同学習を「少人数集団で自分と仲間の学びを最大限に高め合い，全員の学力と人間関係力を育て合う教育の原理と方法」と定義している。協同学習では，個人の力では到達できない高い目標に向かって，仲間同士が良好な人間関係を築きながら建設的に支え合う関係（互恵的相互依存）を形成し，学習者同士の聴き合う関係を積極的に作り出すことで，学び合いを深める[3)]ことができる。協同学習により，相互交流を通して学びの楽しさを体感させ，学び続ける意欲を高めることができるため，生徒の主体的な学びの基盤となることが期待できる。

3.3　年間指導デザインと分析方法

1 年次の実践から，タスクと協同学習を組み合わせることで主体的なコミュニケーションを促し，さらに文法のイメージ化や相手意識をもったコミュニケーションにつながることが分かった。しかし，タスクを行う上で必要な教師の働きかけとして，課題とどのように出会わせるか，協同を支える教師の関わり，英語の文法や語彙に関する学びをどのように結びつけるのかなどの課題が残った。

これらの課題を受け，2 年次では①タスクを効果的に配置した年間計画，②生徒の変容を見取りながら協同の深まりに合わせたタスクの導入，③生徒が支え合い学び合うための教師の関わり，④意識調査を行う。生徒の取り組みの様子や表情の変化等にも着目して分析を行い，タスクと協同学習が生徒の主体的な学習にどのように作用するかを考察する。また，授業の記録・分析を通して，タスクにおける生徒間の協同の変化，生徒同士のやり取りへの教師の働きかけについて分析を行う。

4.　研究成果

4.1　タスクを効果的に配置した授業デザイン

中学１年生を対象に，A 意欲を喚起するタスク，B 既習事項の単元内外でのリンク，C タスクに関連した Small Talk の設定，D 相手意識をもち，安心してやり取りできる協同の 4 点を柱に，生徒の関係の深まりに合わせて授業をデザインした。授業デザインにはタスクだけでなく，必ずペアやグループで相談する場面を設けた。併せて，相談が自然に行えるよう，協同を促す活動

も盛り込んだ。表 1 は生徒の関係の深まりに合わせた年間のタスクや活動を一覧にまとめたものである。

表 1　生徒の関係の深まりに合わせたタスクや活動

	5月	6月	7-8月	9月	10月	11月	12月	1-3月
Authentic				ALT対面	私紹介Poster 歓迎会企画	病気Skit 過半数報告	Greeting Card	学校紹介 レストラン
タスク（情報伝達）（描写）	Small Talk							
情報伝達	自己紹介Bingo	人物さがし		イラスト復元 お絵描き	Partner紹介		間違い探し 場所当てクイズ	国当てクイズ 単語クイズ
情報合成	共通点探し							
ナレーション							動画レビュー	
（創案）問題解決								折り紙
意思決定		自主研計画						5レンジャー 登山ルート
協同	辞書遊び 単語クイズ	音読練習・音読リレー			愛の小劇場 音読練習・音読リレー・和訳交流リレー		イラスト説明 Survival Game Gesture Game	
	内容確認・困りごと共有	内容確認・共通点(相違点)探し・困りごと共有・Q&A相談						

※松村(2017)を参考にタスクを分類し作成

4 月から夏休みまでの間は，相互理解と関係づくりのための活動やゲームの要素を取り入れた活動を中心に行った。また，主体的に学ぶために必要なノート指導や調べ学習の仕方についての指導を協同的に行った。5 月は，安心して聴き合う関係づくりを目指しつつ，生徒の協同を高めるためのタスクとして，「共通点探し」を行った。相手との共通点を探すという目的をもたせることで，相手意識をもって会話し，相手の話をよく聴くようになるため，協同につながるタスクである。新しいクラスでの生活に慣れ，互いのことを何となく知っているが，分からないことも多いというタイミングで自己紹介を通して共通点を探すことで，よりリアルなやり取りにすることができると考えた。6 月には，より深く聴き，本音を交えた深く踏み込むタスクとして，「自主研計画」を行った。グループで自主研修するという想定で，盛岡の名物や観光地のリストから自分の行きたいところを選んで，グループごとに相互にとって良い計画を目指した。実在する都市での将来起こりうる場面を設定することで，生徒のワクワク感を引き出して，活動の動機づけを行った。

夏休み以降は，生徒同士や ALT との会話に焦点を当て，英語を使って表現することの楽しさを実感できるようなタスクを実践した。9 月には，「イラスト復元」という 2 種類の絵の抜けているところを互いにたずね合い，同じ絵を完成させるという活動を行った。2 つのペアを組み合わせた 4 人組で実施することで，英語を苦手とする生徒もインプットベースのタスクとして参加することができ，意欲的に取り組ませることができた。生徒間で「わからない」が言い合える関係ができてきた 12 月には，あえて難しい活動である「間違い探し」をペアでの活動を基本として行った。このタスクは 9 月に実施したタスク同様，絵の情報を言葉で伝える活動であるため，活動の流れがイメージしやすく，内容を重視して取り組むことができると考えた。言語だけでなく，ジェスチャーの使用を可とすることで，英語を苦手としている生徒も意欲的に参加でき，ジェスチャーを見て質問する必要性が生まれることで表現の幅が広がると考えた。

同じ言語材料でも，異なったタスクで実施したり，様々なシチュエーションで繰り返し使用したりすることで，スパイラル的に学びを深めることにつながると考え，既習事項が単元内外でリンクするように単元のデザインを行った。例えば 5 月の「自己紹介」や「共通点探し」での表現を 9 月の「ALT 対面」や 10 月の「私紹介 Poster」などの Authentic な活動で使う機会を設けた。また，タスク前後の活動を同じ授業内だけでなく，単元内に配置することで，何度もその表現に触れる機会を設けた。表 2 は 12 月に実施した単元のデザインである。

表 2　単元計画とタスクとつながる活動

単元	ねらい(■)・主な言語活動等(丸数字)・Task(斜太字)・技能領域(L・R・SI・SP・W)	知技	思判	態度	文法項目
SO Pre	■単元の目標を理解する。 ①Small Talk「When is your birthday?」SI　②教科書の内容理解 L ③パーティ動画の理解L	○			
S1	■現在の動作について説明する。 ①Small Talk「A dreaming birthday party」SI　②クイズ「Where am I?」L ③教科書の内容理解 L・R　④イラスト説明 SP・W	○			現在進行形(肯)
S2	■現在の動作についてたずねたり答えたりする。 ①Small Talk「クイズWho is this?」SI　②教科書の内容理解 L・R ③ジェスチャーゲーム SI・W	○			現在進行形(疑)
S3	■自分の気持ちを伝えるために，感動や驚きを表現する。 ①Small Talk「褒め褒めタイム」SI　②教科書の内容理解 L・R	○			感嘆文
MA UA	■現在の状況を伝えるために，今していることについて説明したり，たずねたりする。 ①Small Talk「What is your favorite YouTube?」SI ②*おすすめレビュー「動画・ドラマ」* SP・W		○	○	現在進行形 感嘆文
Task	■互いの絵の違いを知るために，絵の状況についてたずねたり答えたり説明したりする。 ①*間違い探し「料理学校」* SI・W		○	○	現在進行形
RFC	■現在進行形を用いた文の形・意味・用法を復習し，理解を確かめる。 ①サバイバルゲーム W　②文法事項の確認 W　③文法まとめ「現在進行形とは」 W	○		○	現在進行形

「間違い探し」を行う前に，イラストの状況を説明する活動やジェスチャーゲームをして，協同的に進行形の使用場面の理解を促した。タスク後には現在進行形の文法知識を整理する時間を設け，問題演習を行うことで定着を促した。

ペアやグループでの協力やケアの関係づくりに寄与する活動も行った。例えば，教科書の音読練習は 2 分後に「音読リレー」を行うことを伝えると，生徒は短時間で集中して音読練習をした。回を重ねると，予習の段階で単語にカタカナを振って準備したり，読めない単語を何度も友達に確認したりする生徒もいた。別の例としては，5 月に実施した「辞書遊び」が挙げられる。生徒たちは班ごとに様々な視点で英和辞典を観察し，全体で共有することで，辞書は情報量が多く便利であることを実

感していた。その活動以降，授業中わからないことがあると，生徒たちは辞書や教科書を開いて，互いにのぞき込んだり教え合ったりして，自分たちで解決していた。分からないときに調べられる環境を早い段階で整えることは生徒が主体的に学ぶことにもつながっていた。

Small Talk はタスクに関連させたり，生徒の興味や教科書の内容に合わせた話題にしたりすることで英語を話すことへの抵抗感を下げるという意図もあり，帯活動として行った。初めは 30 秒程度で会話が終わっていたが，最近では 2 分程度継続するペアも出てきている。

以上のような実践を行ったところ，実態調査（4 月）で英語の勉強が「好き・どちらかと言えば好き」と答えたのが 55%であったが，12 月の調査では 65%まで上昇した。12 月の感想記述欄には，「場面に対応した英会話ができるようになりたい」「英語を話せるようになって，英語の授業が楽しい」「難しいところもあるけど理解できれば楽しい」とあり，生徒たちの学習意欲の高まりが感じられた。「ing の使い方が分かった」「現在進行形の時，be 動詞を do と間違えないようにする」という感想からは，自分のわからないところが具体化されていることが読み取れ，生徒たちの文法への関心や理解が深まっていることが分かった。

4.2　協同的な学びに向かわせるための仕掛け

生徒の関係性を深め，協同での学びに向かわせるために，①安心して学習に取り組める（＝認められる）環境を生徒とともに創っていくこと，②英語を得意とする生徒も苦手とする生徒も達成感を得られることの 2 点を重視して授業を行った。

表 1 の下段，協同の欄にある「困りごと共有」は，あえて難しい課題に挑戦させることで「わからない」を引き出し，生徒が協同の必要性を感じているところで，グループで話し合う機会を与えることである。困り感が強いタスクを実施すると，初めにタスクを理解するための協同が生まれ，その後に表現と理解のための協同（＝二重の協同）が起きていた。「みんなが『分からない』を言ってくれることによって，自分もそのことについて深く考えることができる」と生徒が感想を記述していたことから，仲間の口にした疑問を自分事として捉え解決しようとしていたことや，協同での学びの価値に生徒が気付いていたことがわかる。「愛の小劇場」は新出文法を使ったスキット作りである。生徒と対話しながら配役や話，セリフを決め，動画を撮影するという流れで活動を行った。たとえ英語が苦手でも，話の中に自分の意見が取り入れられ，短いセリフやジェスチャーで演者として参加でき，クラス一体となって楽しめる活動である。スキットの作り方を導入する目的で実施したが，生徒の達成感につながった。

このような活動を通して，学級で「わからない」と言っても，ミスをしても受け入れてもらえると感じられたことで，「安心して『わからない』が言える環境」で学習にのめり込み，授業中に得られた「達成感」によってさらに意欲を喚起させることにつながった。実態調査でペアやグループでの学習が「好き・どちらかと言えば好き」と答えた生徒の割合が 76%（4 月）から，84%（12 月）まで上昇したことからも，生徒自身が協同で学ぶことが有益であったことを自覚していることがわかる。英語の授業中にわからないことがあった時に「友達にたずねる」生徒の割合は約 9 割で，「先生にたずねる」と答えた割合の 2 倍以上であったことや，「教科書や辞書で調べる」と約 7 割の生徒が答えていることからも，自分のわからないところを自分たちで解決しようとする主体性が見られた。

4.3　やり取りに対応しながら協同の関係を育てる教師の関わりの特徴

生徒たちが学習集団として成長していくための教師の働きかけには，「協同を促すもの」と「タスクや課題と生徒をつなぐもの」がある。以下にその例を示す。

T：何が言いたくて困ったの？
S1：えーと，得意なのが言いたいとき…
T：（全体に）なんて言ったらいい？
S1：（ペアに）得意なの？ なんだったっけ？
S2：Well!!
T：Well いいね。I can なになに well.
S1：そうだ！ can！ すぐ出てこなかった！

図１　5 月「共通点探し」でのやり取り

5 月の「共通点探し」での生徒同士のやり取り（図 1）では，まだ生徒同士の関係ができていなかったため，教師は協同を促すために生徒の間に入ってペアのやり取りや理解を全体の場に戻してつないでいた。

S1：○○したいですか？って？
S2：What do you want to なになに？
S1：What do you want to なになに？
S3：なになにって？
S2：(What) do you want to do?とか？
S3：Who are you?とか？
S4：あなたは?とかだったら How about you?
返せばいいんだよ。
S3：How about you???
S4：うんうん。
S2：How about you?で「あなたはどうですか？」だよ。

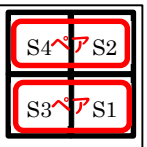

図２　6 月 Small Talk でのやり取り

６月のSmall Talk（図２）ではペアで分からなかった・できなかったことを４人グループで解決しようとする協同の広がりが見られた。S3 が疑問点を尋ね，それをグループの他の生徒がサポートする形で理解を促していた。

12 月の「イラスト説明」（図 3）では，S1 が教師に助けを求めようとするが，教師は S2 の発言を取り上げて S1 に戻すという「生徒同士がつながることへの支援」を行った。S2 は S1 の発言に反応し，S3 は辞書を使って調べ，S4 は S1 に視線を送ってきちんと聞いていることを視線で伝え，グループの全員で S1 の学びを支えていた。

S1：先生！ 水を飲むの飲むって？
S2：（他の班の“drink water”を聞いて）drink！
　T：S2 が教えてくれるよ。（ほかの班へ移動する）
S2：drink に ing つけて drinking…
S1：sing?に ing
S2：singing?
S3：（辞書を引きながら）あった！drinking
S1：（辞書をのぞき込み）Misa…
　※S4 が S1 の顔をみてうなずく
S3：be 動詞が入って…
S2：Misa の後に be 動詞

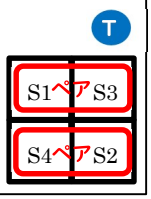

図 3　12 月「イラスト説明」でのやり取り

このように，生徒同士の関係が深まらないうちは，教師が間に入って生徒同士をつなぐ必要があるが，生徒同士のつながりができると，教師が入らなくても生徒同士で学びを支えることができるようになる。

英語を苦手としている生徒同士の活動では，協同をベースにしてタスクとつなぐということも，教師にできる働きかけの一つである。図４はそのやり取りの様子である。

S1：Peter…何？…にぎるかな…？（S2 に話しかける）
S2：にぎる？ making じゃない？（S4 と活動を続ける）
　T：いいんじゃない。Making！
S1：making Peter
　T：Peter is making Peter.だと Peter を作っていることになるよ。Peter is making…何を作っている？
S1：Peter is making …おにぎり！
　T：いいんじゃない？（S3 に）どう？
S3：No.
　T：本当？（絵を指して）Peter is making onigiri.だよ。
S3：Yes.
　T：Yes だね。
S3：Yes. I don't.
S1：…glove?
　T：Is Peter wearing gloves?
S1：Is Peter wearing gloves?
S3：No.

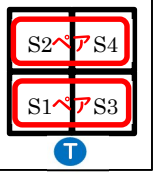

図 4　12 月「間違い探し」でのやり取り

S3 は英語を苦手としつつも，「愛の小劇場」では演者として活躍する生徒である。教師は初め S3 がタスクとうまくつながれていないことに気付き，S3 を支援するために近づいた。しかし，S1 がわからない箇所を積極的に声に出して活動を進めようとしていたため，S1 の表現を補い，S3 の画面を指で示しながら英語でのやり取りを補うことでタスクとつないだ。このように，生徒同士の協同をベースとして，教師が表現を補って，それぞれの立場での視点や考え方が伝わるよう助言することで，タスクとつなぐ事例もあった。その後も S1 がリードする形で，二人は活動を継続させていた。

5.　考察

以上の成果から，タスクやそれに準じた活動を工夫することと，協同性を高めることが，生徒主体の学びにつながることが分かった。タスクはすぐに有効に機能するわけではなく，仲間同士の協同関係を育て，協同をベースにしてタスクとつなぐことを通して初めて自然なやり取りを生み出す。難しい課題にも協同で取り組むベースを作ることによって，生徒の自由な思考や柔軟な発想が生まれ生かされるので，生徒に「託す」という視点も大切である。教師は生徒の興味を引くタスクを準備し，没頭や困り感を見取って，応答的かつ柔軟に関わっていく必要がある。そのため，生徒たちが何を見て，聞いて，考えているのかに興味を持ち，生徒の考えをどう引き出してどう支援するかを考えるという「生徒の隣からの視点」をもつことが大切だ。生徒が安心して学べる学習環境の中に教師が含まれていることを忘れてはならない。

本研究では，協同をベースに，特に「話すこと（やり取り）」をターゲットにしたタスク活動を用いて授業デザインと見取りを行ってきた。今後は，「読むこと」や「書くこと」をターゲットにしたタスク活動も扱い，生徒の主体的な学びを支えていきたい。

引用・参考文献

1）文部科学省：中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説「外国語編」，開隆堂，p.14（2018）
2）松村昌紀：タスクを活用した英語授業のデザイン，大修館書店，p.7，8，9（2012）
3）江利川春雄：協同学習を取り入れた英語授業のすすめ，大修館書店，p.6，9，10（2012）
4）松村昌紀：タスク・ベースの英語指導－TBLT の理解と実践，大修館書店，（2017）
5）加藤由崇，松村昌紀，Paul Wicking，横山友里，田村祐，小林真実：コミュニケーション・タスクのアイデアとマテリアル　教室と世界をつなぐ英語教育のために，三修社，（2020）

宮城教育大学大学院高度教職実践専攻　実践研究論文（令和４年度）

生徒が主体的に学ぶ指導の工夫
－中学校英語科におけるコミュニケーション活動の充実を通して－

坂本　英子(21024)

要旨　本研究は，「コミュニケーション活動に積極的に取り組み，英語習得のために粘り強く努力する生徒」の育成を目指し，生徒が主体的に学ぼうとする意欲を高める課題（タスク）と，生徒の主体的な学びを支える学習環境（協同）について考察することを目的とした。中学 1 年生を対象に授業実践を行い，タスクを効果的に配置した授業デザインや，協同的な学びに向かわせるための仕掛け，やり取りに対応しながら協同の関係を育てる教師の関わりの特徴などから分析を行ったところ，教師が生徒の興味を引くタスクを準備し，没頭や困り感を見取って，応答的かつ柔軟に関わっていくことが大切であることが分かった。

キーワード：主体的，タスク，協同学習，授業デザイン

ユニット指導教員（◎ユニット長）
◎金田裕子，鈴木渉，齊藤千映美，本田伊克，吉村敏之，越中康治，澤田茂実，仲谷健太郎